

日台の関係

| | |
|---|---|
| 時 | 論 |
| 新 | 論 |
| 理 | 想 |

「植民地」時代の研究遺産

三尾 裕子
(みお ゆうこ)

東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授

先日、ある先輩の人類学者から、台湾の有名な在野の研究者Y氏の言葉として次のようなことを教えて頂いた。曰く、最近日本の学者は「植民地」という用語をよく使うが、以前の台湾は「植民地」ではなく、日台の関係は日本の領土内の関係だった、と。台湾の人びとが親日ののは有名だが、驚くべきことに、彼は「植民地」ではなく、「日本」を生きてきたと考えていたらしい。

広辞苑によれば「植民地」とは「ある国の海外移住者によって、経済的に開発された地域。本国にとって原料供給地、資本輸出地をなし、政治上も主権を有しない完全な属領。」とある。この定義に従えば、日本統治時代の台湾は、「植民地」である。たとえ「内台一如」といった理想が掲げられたとしても、日本は台湾を原料供給地と見なしたし、台湾人は日本人から社会的に差別された。

その時代の資料のもつ意味

筆者の専門である人類学が、帝国主義国家による「植民地」における異民族支配とともに発展したという認識は、最近では常識になりつつある。人類学は「植民地権力」という虎の威を借りて他者のことを調査し、統治に役立つ資料を蓄積し、支配者と被支配者の不平等を強化してきたと批判されている。しかし、そうやって我々日本人が、過去の日本人人類学者が台湾について記述した民族誌を「植民地主義的」と自己批判しても、必ずしも今の台湾の人たち



の賛同をえるとは限らない。ましてや「植民地」概念によつてY氏のような人の経験を理解しようとしても、的外れになりそ

平地先住民(シラヤ族)の祭祀の踊り
(1930年代)



最近台湾では、多数派の漢人に同化した人びとのなかから、日本統治時代に書かれた論文をもとに失った文化を再現し、先住民意識をもち始める人びとがあらわれ始めている。例えば、一九〇二年に伊能嘉矩が書いた論文に基づいて儀礼を再興し、ホニア族としての意識をとり戻そうとしている人びとがいる。また、一九三〇年代に浅井惠倫が残した調査資料から漢化が進んだシラヤ族に伝わる儀礼的な歌を再構築する試みがなされている。「植民地主義人類学」批判にならえば、これらの記録は当時微かに残つていた文化をすくいあげたものにすぎず、支配者文化が現地の文化を強引に変えていつた状況を直視していないと批判されるかもしれない。しかし、今台湾人は、「植民地」とは別の文脈で過去の記録に利用価値を見出している。

もちろん、筆者は当時の日本人による研究を擁護しているのではない。しかし、それを今日の研究者の視点で断罪するよりも、今現在そこに生きる人びとの視点に寄り添つて、あの時代を如何に記憶し、何と名づけるのか、そしてその時代の資料が今日の彼らにとってどのような意味をもつのか、といったことを地道に理解していくことこそが、必要ではなからうか。

なお、民博では、九月二日から二月二日まで、「東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所 豊潤資料展」(一九三〇年代の小川 浅井コレクションを中心として)が開催される。前述の浅井惠倫などが日本統治時代に収集した言語学・民族学資料が展示されるので、是非ご覧いただきたい。